

れていたこともうなづけるのである。

昔といつても、流通の進んだ江戸時代には、京の鳴滝砥、大和の春日砥、紀州の神子砥ミコド石近くは白っぽい伊予砥イヨト○などが出廻っていても、奥地の百姓や山人もは、幸いというのか砥にも使用出来る、阿讃山地の堆積岩があるので、或はそれを拾って使用したことでもあろう。

#### 十四 硯石

硯石も砥石に似て、堆積岩が多く使用されるが、砥石よりも質が堅いのがよいとされる。京の鳴滝石は上等の砥石で、古くは公方様方の刀をといだものだが、硯石としても使用された。硯は砥石が刀剣刃物を磨くのと異って、何分にも文人墨客が愛好するものだけに、各自の趣向もあつて随分各地の名石というものを、どんどん利用して作っている。したがって、全国的には硯石の名は随分と多いも

のである。

しかし今の人々にも輝緑凝灰岩の赤間硯と粘板岩の雨端硯アマバタぐらいは、よく知られているであろう。

され、それでは讃岐に硯にした石があつたか、なかつたか―ある。「鶴羽石を硯とすると佳品でさる―」と、名勝図絵や、松岡氏の新撰讃岐風土記に述べている。これで見ると、愛硯家の中に、この鶴羽石を硯とした人もあつたに違いあるまい。鶴羽は今の志度町―その打伏端ウツブセノハナの海中に産するというのが、岩質は、サヌカイトに似て、色は黒く、斜長石と雲母、それにサヌカイトと同様、古銅輝石のはいつた安山岩で、やや玻璃質になつていて、堅い、「雲母粗面岩質古銅輝石安山岩」  
とでもいうべき石であると保育社の岩石図鑑にも載っている。

硯石といえは誰でも、中国の端溪石―が、先ず上品として知られている。しかし、元来、中国―日本でもごく古いところでは焼いて作った、陶器―陶硯であつた。瓦のように焼いて硯をつくつたもので石は使わなかつた。後に中国で石の硯を使

用するようになり、端溪石を紫石と違って、これを愛翫したものだから日本でも、端溪石の紫に近い石質が、赤間ヶ関の赤間石に見出して、これを我国の端溪石になぞらえたりしたものだ。

今では陶硯や瓦硯と違って瓦で作った硯も見ることがもないが、古いところでは、正倉院に陶硯が一ヶ所蔵されている。世に瓦硯と違って、太宰府の都府樓や、諸国の国分寺趾などの瓦で作った硯を所蔵する人もある。

坂出にある郷土博物館―そこには坂出塩田開発の恩人、久米栄左衛門関係のものが多いが、その栄左衛門の製作した瓦硯が一ヶ所蔵されている。九州都府樓の古瓦で作ったもので、何かこれまで私の抱いていた栄左衛門―その人のイメージを変えさせてくれるような珍しいものであったから、余談ながら、ここに附記して置いた次第である。